

高校野球特待生問題有識者会議

(第3回)

平成19年8月20日(月)

・出席者(11名)

伊藤 進 宇津木 妙子 河上 一雄 北村 聡

栗山 英樹 後藤 寿彦 ヨコゼッターランド 田村 哲夫

辻村 哲夫 堀田 力 望月 浩一郎

・欠席者(4名)

浅井 慎平 奥島 孝康 草野 一紀 島宮 道男

(以上 敬称略)

(少年野球関係者の活動実態報告)

・全日本リトル協会シニア委員会

リトルシニア関東連盟 南関東支部所属

監督 鈴木 茂さん

・日本少年野球連盟出席者

専務理事 関 康雄さん

滋賀県支部所属 大津瀬田レイカーズ(中学生の部)

監督 近藤 皓二さん

1. 座長 あいさつ

○堀田座長 暑い中ですが、頑張ってやりましょう。よろしくお願いします。

お手元に、会議の次第は配付されておりますね。この順序で進めたいと思います。

では最初に、田名部さん、資料説明をお願いします。

2. 提出資料の確認

○田名部参事 皆さんにお配りしました資料のうち、最初にカラーで「資料No. 3-1」とございますが、日本の野球界の団体図というのがありましたので、これをお配りさせていただきました。それこそ第1回目に配るべきだったと思いますが、大枠で囲んでありますのは「全日本野球会議」ということで、プロ野球もアマチュアも一緒になって、十数年前から円卓会議をやっております。そして、「全日本アマチュア野球連盟」というのがありますが、これはアマチュアの連盟の統括団体ということではなしに、国際大会に参加する場合の事務上の機関ということで、便宜上、JOCに加盟しております。大きくは、「日本学生野球協会」、大学、高校の連盟と、それから社会人野球、「日本野球連盟」に分かれます。当然のこと、「日本野球連盟」、社会人野球の方は、いわゆる社会体育でございますから、今日お越しいただいた「全日本リトル野球協会」、それからボーイズリーグの「日本少年野球連盟」が加入団体となっております。

この学生野球、社会人野球とは別組織で、軟式野球、これは日本では本当に多くの社会人たちが、それこそ週末になったら軟式野球を全国各地で楽しんでおられるんですが、それを統括する「全日本軟式野球連盟」、ここには小学生の部も、それから大学の軟式野球なども含まれております。少年野球の方では、右の方にKボールだとかポニーだとか、そのほかの連盟が書いておりますが、ここに挙がっていない連盟も、地域活動として部分的にあります。そして、下の方のプロ野球、これはもう御説明するまでもありません。ざっとした組織図ですので、御参考までに。

それから2番目、折れ線グラフがございますが、「資料No. 3-2」。皆さんに一番最初にお送りした資料は昨年までのものでして、今回、この夏の選手権大会の全国大会に出場しました学校49校の選手登録、1校当たり18名ですが、その中に含まれる他府県からの中学出身者の数を出しましたら、昨年の88回大会が82名だったのに対して今年は96名と、やや増えておりますが、これは出場校の中で一般的に公立高校と私学の関係で、公立高校が多いとこれが下がるとは思うんですが、やや増えたかなと。85回、86回が125人、135人と、このグラフではピークになっておりますが、ややその時点からは下がったような形です。選抜大会は、下の方、今年も去年の春も同じ、50人ずつの同数でした。全国大会の概況です。

それから、「資料No. 3-3」を御覧ください。これが、初めて昨年の夏から手がけたのですが、先ほどは夏の全国大会に出場したチームですが、これは地方大会、予選に出場した全チームの登録の概況を洗ってみました。8月7日に既に新聞発表はしたんですが、表はちょっと細かい数字で恐縮ですが、昨年の88回と今年の89回を横に並べて対比しました。一番左端、参加校、昨

年4,112校に対して今年4,081校と、各地で統廃合が進んでおりますので、やはりこのように30校ぐらい参加校としては減っておる。

ただし、欄外の下を御覧ください。参加校はそのように減ってはおりますけれども、加盟校としてはもっと減っていきまして、50校ぐらい減っているんですが、登録部員数は逆に3,000人ほどプラスといいますか、16万8,501人と。この数字は、過去10年間連続で前年比プラスということで、学校数は減っているんですけども、部員数は増えているという状況でございます。

しかしながら、今度はこの表の一番右側、登録選手数というのを御覧ください。昨年が7万6,000余りに対して今年7万5,706人、ここでやはり選手の数は減っています。これは、地方大会の登録人員というのは概ね18名で、上限は20名となっていますので、4割ぐらいの連盟は20名登録していますから、全国一律ではないんですけども、その登録した、いわゆる今回の対象となった人数の総数です。7万5,706人、去年よりも減っているというのは、やはり18人登録できても、15人しかいないとか12人しかいないとか、そういうチームがあるという意味で御理解いただいたらと思います。

もう一度、左の方に戻りまして、そういう登録選手が県外から来た部員数を学校数で出してみました。1名から4名、それから5名から9名、10名以上、こういう具合に区分別しますと、10名以上が昨年は34校だったのに対して今年106校と、例えば5名以上の分も、いずれも去年より県外選手の登録は、ずっと増えておるとい状況です。

そして、隣、その内訳ですけども、遠隔、隣接、県外合計となっておりますが、これはその部員数でございまして、地続きで県が隣り合わせになっているのを隣接としました。海を挟んで隔てているのは遠隔地ということで、地続きでないものを遠隔地としましたら、今年1,346人、それから隣接は1,910人と、いずれも少しずつ増えておるわけです。これは、登録された選手がどこから来たかということを今お話ししましたが、一番右側、遠隔県外へ流出した部員数、これは自分の出身した中学校とは別の都道府県に進学した生徒数を表してございまして、これが去年より86人増えて1,346人、中ほど、大阪のところを御覧ください。427人、これが突出した数字です。2番目が、兵庫県の125人、そして神奈川の110人、東京の86人と続きます。

これが地方大会の登録の状況ですが、もう1枚、A3の紙を御覧ください。これは、今、説明しました「資料No.3-3」の基礎資料になるものです。これは、横軸がどこから来たかという流入を表します。縦軸は、流出です。

例えば、先ほど紹介しました大阪の欄を御覧ください。大阪は、県外から来た生徒が123名。その内訳として、隣接101名、遠隔22名、これが流入した分です。当然、都市部ですから、隣接県が非常に多いということになりますが、一方、縦軸の大阪を御覧ください。北海道の6から始まって、ずっと一番下、427人、この427人という県外に行った生徒がどの都道府県に行ったかというのが、この縦軸でわかる仕組みになっています。

そして、表には「隣」と書いて数字は入れ込んでおりませんが、ここは、ですから遠隔地の生徒の分布がこれでわかるということですのでございますので、皆さんが御関心のある県をチェックいただいたらと思いますが、今申し上げた流出で顕著なところは、大阪、それから兵庫、神奈川、東京ということですが、今度、流入の多い県を上から拾ってみますと、全部で50名以上が7県ございまして、山形、それから東京、静岡、岡山、香川、愛媛、宮崎と。あと、島根と福岡が49名、48名、神奈川も45名と続きますが、皆さんがイメージしておられる県外の生徒の分布が、大体これでおわかりになると思います。

今後、この調査は引き続き調べていこうと思っておりますが、去年と今年とを対比した表でございます。

そして、「資料No. 3-5」を御覧ください。3-5は、先ほどの県外に流出した状況で上位4都府県、つまり、大阪、兵庫、神奈川、東京、ここから他府県に行った生徒が多いわけですが、それらの都道府県で、一たん他府県に進学したんだけど、やめて帰ってきて転校なり再入学という生徒の実態はどうなっているかということで、それぞれの県の連盟での登録を、16年から18年の過去3年間にわたって全部チェックしてもらいました。

例えば、大阪は、そういう具合に帰ってきた生徒が、公立高校で3名、私立で11名、その内訳として、前の学校は同じ公立の同一府、これが2名、隣接の公立高校から1名、私立では、同一の大阪府内の私立から2名、それから遠隔地が9名という具合の意味で書いてございます。ちょっと目立つのは、この大阪の私立の「寮生活不適應」が7名いたというようなことになります。

あと、兵庫、神奈川、東京と書きましたけれども、実はこれにもう1枚、再入学、先ほどののは1年生の途中、例えば1年生の1学期が終わって、2学期に同じ学年で転入したと。2枚目のものは再入学ですから、その年はやめて、翌年、改めて別の学校に1年生から行き直したというような数字でございます。全部で47名いまして、公立が41名、私立が6名、親元へ帰ったということで、改めて再入学した学校は公立の方が圧倒的に多いと。

御想像いただけたと思いますが、実は3年間で49名ですから、1年間で16名ぐらいということで、正直言いまして、私たちが予想した以上に少なかったです、これは。もっと多いのかなと思ったんですけども、そうではありません。何をもって少ないかといいますと、実は先ほど16万8,000人という部員数を御紹介しましたが、現在、これは毎年統計をとっております、5月末でそれぞれの学校の登録数を連盟に報告してもらっているんですが、今の3年生は、歩留まり率といいますか、継続率と私たちは呼んでいるんですが、1年生に入ったときの生徒が5万人ちょっと3年生としているわけですけども、81ポイントぐらい、つまり、1年生のときに入ってやめたのは100人に対して19人、こういうことで非常に継続率がよいと思っております。ですから、19%は途中でやめた生徒ですから、そういった数字を見ますと、この数字というのは極めて少ないと。

あと、実態はわからないのですけれども、退部届を、それぞれ例えば非常に県外が多い学校の数字も見ましたけれども、そんなに多い数字ではありません。まだ全部まとまっておりませんので、今日、報告できませんでしたが、大体、割合として7%から、一番多いところで11%ぐらい退部者がいるということで、これは運動クラブの実態としては、5%から11%というのは、特別、それでもって悪いということではないと思います。

ただ、その生徒たちがドロップアウトして、「僕はもう野球をやるのは嫌だ」と思ったような生徒がいたら、それは問題ですけれども、ちょっとそういう点があります。一応、参考までです。

それから、最後の資料ですが、「憲章13条違反とされた特待生制度の分析」。先般、田村先生の方からは、私立連合会の方ではあまり詳しい資料はないと言われておられましたので、一応、376校の概況を分析しました。

ただ、これは、学校から提出された資料をあくまで私どもで見ただけですので、直接「これはどういうことですか」ということをヒアリングしないと、もっと正確なことになりません。ですから、100%信頼できる数字ということではなく、読み取れる範囲でやったらこういうことだと。学校の附属機関1、外部機関3、学校の附属機関は何かというと、これは社団法人の同窓会でした。外部機関というのは、後援会が2、父母会が1と。あと、ずっとそこの表を御覧いただいたらよいのと、2枚目に、これも学校で特待生に関する規定を設けているかと。ほとんどがあるんですけれども、20%強は「よくわからないな」というのもありました。それから、審査機関、定数の規定、こういったものも御覧いただいたとおりです。

それから、問題はこの特待生の人数ですが、分布を分けてみましたらこんな形になりまして、下の方に60人以上だけ書いておきましたが、例えば65人のところは、86人の部員の部員に対して65人が特待生という意味で、最高は101人の部員に対して87人、このようなことでした。御参考になればということです。

3. 海外の奨学制度の実態について

○堀田座長 また御質問は、御意見のときに関連して、していただければと思います。進めたいと思います。海外の奨学制度の実態、私どもが判断する場合に、非常に重要な要素になると思います。ゼッターランドさん、よろしくお願いします。

○ゼッターランド委員 このたび御依頼をいただきまして、アメリカでのスカラシップ、奨学金制度の事情というのはどうなっているのですかということで、私自身が、競技はバレーボールが専門であります。ただ、恐らくこの奨学金制度というのは、全部のスポーツに共通して言えることだと思います。

先に申し上げますと、私自身は、アメリカの高校から大学に奨学金制度をもらってスポーツをしたという経験はございませんので、今日お伝えすることは、ナショナルチーム時代の元同僚、もちろんバレー選手ですけれども、スポーツのスカラシップ、奨学金制度を受けて高校から大学

に入学して卒業しているという選手がほとんどでした。そして、今回、少し元ナショナルチームのスタッフ、今度、リクルートする方の立場の人たちはどう選手たちと接しているかなどを聞きまして、それをまとめてまいりました。恐らく、もっと詳しい調査的なことは、この後、後藤様の方から御説明いただけたと思いますので、現場での選手たちの実態ですとか選手たちの意識ですとか、そういったものを少し次のお話につながるようにお伝えできればと思っております。

まず初めに、元スタッフに聞きましたところ、今回、日本では高校生の野球に対する奨学金制度、特待制度が問題になっているので、高校生のアスリート、現役の高校生に対して、そういった奨学金制度あるいは特待制度というものがスポーツであるのかということを知りましたら、これは「ありません」という答えが返ってきました。恐らく、その背景には、アメリカでも幾つかのプロスポーツ、メジャーなスポーツがありますけれども、そのプロスポーツに次いでメジャーな競技レベルというのは、何といてもやはり大学スポーツ、カレッジスポーツがあるということが言えると思います。それで、今、大分皆さんも、アメリカのそういったスポーツ事情というものも随分いろいろな形で伝わってきていると思いますので、御存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、一応、レコードに残るということで、そういったことも少しお伝えしていきたいと思えます。

実際に、各大学レベルになって、初めてそういった奨学金制度あるいは特待制度が設けられるわけですが、大きく2つに分かれていまして、アカデミック・スカラシップ、これは学業に対する奨学金の給付ですね。そして、もう一つはアスレチック・スカラシップ、これはスポーツに対する奨学金制度が設けられていて、アメリカでも実際に、アカデミック・オールアメリカンですとかアスレチック・オールアメリカンといった形で、優秀な選手あるいは学生を表彰するという制度もございます。そのもとになるものでもあると思えます。

そして、実際に大学の奨学生を選ぶに当たって、その選考委員会、コミッティーというのがあるんですが、その委員になられた方というのは大変厳しい制約がいろいろありまして、当然のことながら、リクルートしようとしている学生との接触というのは、かなり厳しい形で禁止されています。例に挙げていいますと、例えば、遊びで「では、一緒にちょっとゴルフに行こうか」とか、そういったことでの接触も許されないということをおっしゃいました。

実際にどのように、アスリートは進学、またリクルートする側は選手を勧誘するかというのは、何といたしましても、まずは学業成績を重視するということになっております。GPA——Graduate Point Average、日本でいえば、恐らく「学業の評定平均」と置きかえることができると思うんですが、高校でのGPAをもとに、そのアスリートが——あるいは学生という言い方もできますが、大学入学後も学業とスポーツをきちんと両立できる学生であるかということをお勘案した上で大学に勧誘する、こういった形ができております。

例えば、西の名門でスタンフォード大学という、学業でも、またスポーツでも、ゴルフのタイ

ガー・ウッズ選手がたしか中退だと思っただけなんですけれども、ゴルフ、あるいは水泳、バスケットボール、野球、バレーボールと、大変スポーツでも、アカデミックでいてアスレチックな大学として非常に有名でございますけれども、例えばそのスタンフォード大学でゴルフをしたい、学校に通いながらゴルフ部に所属したいという学生のそういった希望等があっても、学業レベルがそこに伴っていないければ、進学するという事はやはり困難です。そういった現実がありますので、リクルートする方も、「ちょっとこれはいい選手だけれども、やはり難しいだろう」ということで、リクルートを断念するという事もございます。

また、先日、浅井委員がお越しだったときにも、お嬢様がアメリカの大学に通われているということで、少しお話を聞いたということをおっしゃってございましたけれども、例えば入学がなかった学生も、入学後の学業成績が芳しくなければ、一定のレベルに戻るまでスポーツ活動が停止となるケースも決して少なくはありません。「特に」という言い方をしてよいのか、「ただし」と私はメモしてきてあるんですけれども、アメリカンフットボールですとかバスケットボール、これは男子の競技としてはプロに直結しております。大変、アメリカでも花形のプロスポーツということで人気ですけれども、当然、大学としましては奨学金制度を、男女をなるべく平等に、いろいろなスポーツに奨学金を分配していくという、アメリカで「タイトルナイン」という、今から15年ぐらい前に最高裁の方までもつれ込んだルールといいますか、そういった奨学金分配制度、男女平等ですとか、1つのスポーツに固まらないようにですとか、そういったアメリカらしい独特の平等精神みたいなものを追求したルールができたことによって、ほかのスポーツにも奨学金は分配されるようになったんですが、その中でもプロスポーツにつながるアメリカンフットボール、バスケットボールは、やはりかなり多くの奨学金が獲得できる割合を大学の中でも占めているということがありますので、そういったプロにつながるということを考えますと、大学側も当然いろいろな思惑が働きますので、本当にその学生が学業の要求されているレベルをクリアしているかどうかというところ、そのレベルを保っているかどうかという疑問も、実情として浮かび上がってきているということもあります。もっとはっきり言ってしまえば、本当は卒業できないのに、本当はスポーツの活動をしてはいけないのに、大学側が学業成績に下駄を履かせているのではないかという疑惑もあったり、ですとか、これは何も一つの国に限ったことではないということ、話を聞いて、私自身、ちょっと感じたところでございます。

プロスポーツが充実しているその反面、やはり学生に対してアマチュアリズムというものを、かなり徹底した形で追求している部分というのがあると思います。大学は、全米大学体育協会、これはNCAA—National Collegiate Athletic Associationの略でございますけれども、この指導の下で、例えば奨学金以外の金銭、またはその同等価値と認められるものの授受に対しまして、その対象学生には大変厳しい制約を設けております。

例えば、皆さん、今、飛行機などのマイレージプログラムというのは御存じだと思っただけ

れども、学生が移動する際に航空機を使用しまして、その使用した際に距離が加算されて、マイレージプログラムの中で獲得可能な特典航空券といったものがございます。これは、何かただでもらったような錯覚を起こすんですけれども、実際には金銭と同等価値があると見なされまして、奨学金をもらっている学生本人はその使用が認められないといった、大変細かいことですが、そこまでアマチュアリズムというものが徹底しているのかということを知りまして、大変驚いたことを記憶しております。

また、別のケースで、これは若干外れるかもしれませんが、例えば、大学にスポーツで奨学金制度を受けながら入学しても、入学後にファッションモデルとして仕事、活動を始めた選手が、活動することによって給与を受け取るようになったため、当然のことながら、学費の支払い能力が十分あるとの判断が下されたので、この場合はその奨学金の支給が停止となったというようなケースもございました。ですから、基本的に大学で支給される場合というのは、当然、スポーツ、そして学業に専念して、実際にスポーツならスポーツの方の持っている能力を評価して、そしてそれを遺憾なく大学でプレーして、才能を伸ばして行ってほしいという願いのもとに渡されているものですから、こういった別の活動で潤っているのであれば必要はないでしょうという、これは当然のことだと思います。ただ、ケースとして、1つ御紹介したいと思います。

あちらで生活しておりましたときに、今回、こういった特待制度、あるいは奨学金制度の問題が出てきた中で、やはり選手がいろいろな家庭の事情ですとか経済的事情を抱えている中で、せっかくの才能を、少々乱暴な言い方をすれば、もしお金で解決できることなのであれば、それを活用しないでいる手はないと、私などは自分自身が選手だったという経験も踏まえて感じるんですけれども、そういった中で非常にユニークなアイデアをアメリカの中で見たことがございまして、これはプロスポーツ選手、あるいは地元、全米に広がっております企業とその奨学金の関連ということで、1つ御紹介したいと思います。

アメリカの場合ですと、日本と比べて生活水準ですとか収入格差が、これはもう随分異なる。そして、あまりにもその層が広いということでは、若干、日本とは異なるところはあると思うんですけれども、例えば貧困や生命の危険にさらされているゲットー、貧民窟で育っている子供たちもかなり多くおまして、そういったところから抜け出すことを切に願う子供たちや家族も決して少なくはなく、その一つの手段として、やがてプロスポーツ選手になることを、やはり日々夢見る子供たちが多いわけですね。そういった選手が、日本の中にもいないとは思えないんですね。せんだって、プロとのいろいろつながりということで謝罪会見をした選手の言葉などを聞いていますと、ちょっと身を切られるような思いもございました。

話はアメリカの方に戻りますが、そういった環境出身の選手たちが、「Stay in School」、これは学校に行こうと。例えば、そういった貧民窟の中で育っている子供たちというのは、生活するのに必死ですから、薬物に手を染めていたり、その売人になったり、あるいは売人の手先に

なったり、そういったことで学校からドロップアウトしてしまう子があまりにも多い。それが犯罪につながる。それを防止しようということで、「stay in School」——学校に行きなさい、学校にとどまりなさいというキャンペーンをやっている選手というのが非常に多いんですね。それをライフワークとしたり、あるいはそういったところ出身の選手が、地元、なるべくそういったところにいるいろいろなことが還元できるようにということでの慈善活動も含めてやっているんですが、そういう選手がメディアとタイアップしたイベントを開催しまして、これはバスケットボールの例だったんですけども、ハーフラインのところからシュートを決めるという一つのゲームではあったのですが、そのときにそのシュートを見事に決めた——これは女の子だったんですけども、大学に4年間通えるだけの奨学金を選手のポケットマネーからプレゼントしたといったイベントがございました。

また、先日、私はシアトルの方にマリナーズの取材で行ってきたんですけども、別件、実は近郊のワイナリーに行きましたときに、地元の大学、ワシントン州立大学、そしてワシントン大学、この2つの大学に、スカラシップ、スポーツと学業、両方につながる奨学金基金の設立のために、そのワイナリーでスティービー・ワンダーといったトップアーティストを招いて、コンサートとディナーといったものを開催して、企業、あるいは篤志家といいますか個人から、そういう学生のための奨学金基金の設立につながるパーティーを開催したということがありましたので、そういったこともケースとして御報告させていただきます。

奨学金制度が実施されていく中で、よくアメリカはそういったスポーツする環境が整っていると見られがちですが、問題が全くないというわけではございませんで、例えば学生の学業レベルが本当に中身として考慮されなくてはいけない部分というのもあると思うんですが、少なくとも子供の持っている限りない可能性と、そしてスポーツが人間の生活、生きていく上で、その生活にもたらす豊かさですとか、そういったものをサポートして大切に育む態勢が整っているなどということは感じております。社会的にもその意義が確認されておりますので、こういったところで、これまで特待制度があった、本当はルールに則っていけば「いけない」と言われていたことが起こったということでは、やはりそれを今後どうしていくかということを考えていくことが大事なのではないかなということ、いろいろこれをまとめながら思うところがございました。

本当は、後ほど質問をさせていただこうと思ったんですが、例えば、これに関連しまして、せんだっていただきました「学生野球規約集」の中で、いろいろ寄附金、寄附行為についてのQ&Aのところを読ませていただいていたときに、もしお手持ちでいらっしゃれば、64ページのところに設問が幾つかございまして、若干、この奨学金、特待生と寄附行為というものがどこまで関連性があるのかと言われれば、甚だそれている部分もあるかと思うんですが、設問53のところ、「大会出場に際し、プロ球団からの祝いの金品を受け取ってもよいか」で、これは答えは「いけません」となっているんですが、戻って50のところ、「プロ野球選手、OBの方から、野球部

母校に寄附金をもらってよいか」といったら、「個人の立場としてならば、差し支えありません」ということが書かれているんですね。これを一体どう解釈したらよいのだろうかということをおもいましたので、後でも結構でございますので、このあたりとの関連、あるいは特待制度、奨学金制度への取り組み、あるいはその対応、学校との関連、こういったものを連盟の方でどのようにお考えになっていらっしゃるかも伺いたいと思います。

若干長くなりましたが、以上でございます。

○堀田座長 ありがとうございます。

答えはまた、後でも次回でも結構です。

後藤さん、補足いただけますか。

○後藤委員 ゼッターランドさんの御説明で、ほとんどだと思いますけれども、私が先ほど言われましたNCAAのルールを調べようと思ったきっかけは、慶応大学の監督時代にアメリカの遠征へ行きまして、先ほど出ましたスタンフォード大学、UCLA、この2つの大学とオープン戦、交流試合をしまして、そのときにスタンフォードのマーク・マルケス、これは有名な監督ですけれども、UCLAをやめました、ゲーリー・アダムスという、この2人の監督から、「ミスター後藤、日本の大学では特待生制度は何人までよいのか」という質問を受けまして、「ありません」と言ったら、「そうしたら、Aという大学がいつも優勝するのではないか」と言われまして、それがきっかけで、ちょっと調べようと。もちろん、日本学生野球憲章との絡みで、アメリカのNCAAのルールを調べて、日本に当てはまるものがないかということで、今日のテーマのそれこそ中心になるようなものを、実は調べに行きました。

野球という種目に特化しますと、ディビジョン1とディビジョン2と、これは学校の体育の施設で分けております。人数とか、そういう施設、体育会の部の数でディビジョン1、そしてもう少し少ない数の大学のグループをディビジョン2と。短期大学は含まれておりません。

そういう中で、ディビジョン1とディビジョン2のルール集、実は私も入手しましたが、とんでもない分厚いルール集がございまして、これはいろいろ調査をしたら、ルールを破るから、そういう今、ゼッターランドさんが言われたルールができた。シアトルでワシントン大学にお世話になって国際野球大会をやったときに、アメリカンフットボールが非常にあそこの大学も人気でして、もちろん賭けの対象にもなるぐらいの人気スポーツでありまして、日本の我々大学野球部の関係者などは、例えば選手がちょっと調子が悪いと、簡単に言えば、「今日、一杯飲みに行くか。食事しよう」と、そこでいろいろ悩みを聞くわけですね。そういうことも、アメフトの場合は、コーラとハンバーガーだけの金額以内でやりなさいという規定までであると聞きました。これが12年前です。これは、アメフトのルールの中にあるらしいんです。これは、選手を買収して八百長にかかってはいけないというようなことで、そういうルールができた。

先ほど言われました大学の監督が高校生をリクルートする場合でも、例えば、私がある高校生

に慶応大学の施設を見せて説明するのに、日吉という大学のあるところへ呼ぶとします。そうすると、その校庭ですね、2泊3日まで、1泊につき宿泊費は何ドルまで、食費は何ドルまでということが、実はそのルール集にも規定されています。これは、リクルートが加熱したために、そういうルールができたんだと。アメリカの方は、リクルートが非常にそれだけ激しいんだということの証明だと思います。

もちろん、先ほど言われましたスタンフォードあたりは、タイガー・ウッズがスポーツの奨学金制度ということで入学して、中退してプロになったわけですがけれども、地元関係者の中では、学業のスカラシップも、多分、彼には入っているのではないかと。そのくらい優秀な選手には手厚くしているということも、少しうわさとして聞いております。

野球に特化しますと、学業との両立につきましては、ほとんどの大学でも単位を落とすと練習には出られないというのは厳格なルールがあります。そして、スカラシップの打ち切りというものももちろんあります。それで、種目によって人数が決まっている。野球の場合は11.7ポイント、器械体操は6.7ポイント、アメフトであるとか人数の多いものはもう少し多い人数で、11.7%というかどうかといいますと、向こうの人は1170%と言うんですけれども、11人が全額授業料免除、12人目が70%免除。ですから、それが上限ですので、それを分散して、もう少し多い人数でもよいのですけれども、大体アメリカの大学の部員というのは、ほぼ35名が限度と決まっております。ですから、そのうちの1170%という意味合いでやっております。

そういう種目ごとのポイントがありまして、それは打ち切りがあると。打ち切りがあった場合は、ほとんどの学生はよその大学へ転校する場合があります。大体2年で転校していくケースが多いと聞いております。奨学金を打ち切られた段階で、次の奨学金を出してくれる大学を探していくというのが実情だと思います。

ちなみに、野球の場合は3年生が対象になりますので、3年生の学期が終わった6月の第1週にドラフトがあります。そこで、高校生も含めまして1,500人ぐらい、毎年ドラフトにかかるわけですがけれども、そのうち1,000人ぐらいが恐らく大学生ではないかなと思うんですが、ですから4学年で、中心選手で、大学でバリバリやるという選手は、あまりいい選手がいないということで、そういった意味でスカラシップの打ち切りというのは、4年生まで持ち越してやるというのは、野球の場合は少なからうと思います。

次に、アメリカの大学野球というのは、アメリカの社会は機会均等というのをすごく言いまして、年間の試合数が決められています。57試合、そのうち1試合は海外チームとの試合をやってよい、海外遠征は4年に1回と、とにかく機会均等、公平性というのを非常に強く打ち出しております。先ほど言いました奨学金で集めた学生が、大学の広告塔で入学して、学業に対しては一般学生と違う特別待遇で卒業するというのを非常にやり過ぎたためにいろいろなルールができましたということが、どうも本音のようです。

野球の場合の大学の年間スケジュールでびっくりしたのは、チームの練習許可日というのがございまして、年間に日にちが決まっております。びっくりするほど、いわゆるテクニカルコーチ、ヘッドコーチ、バッティングコーチであるとか、日本で言う監督であるとかピッチングコーチ、この人たちが練習指導できる日にちというのは、ちょっと細かい数字はわかりませんが、150日ぐらいと聞いております。コンディショニングコーチ、あるいはストロングスコーチ、技術以外のコーチが教えられる日にちも、年間何日と決まっております。ですから、アメリカのヘッドコーチ、いわゆる監督は、そのルールに対して非常に不満を持っておりますけれども、これはなぜかという、学業に支障のないような練習時間を振り当てているということでありませう。これは、NCAAの方が、要するに学生の特待生選手でも一般学生と同じように学業をなささいということのあらわれであるということを知っております。

以上です。

○堀田座長 ありがとうございます。質問はたくさんあると思うのですが、ちょっと時間が押しております。もともと、アメリカ全体のスカラシップを10分、5分で話せというめちゃくちゃな注文でありますので、本当にまだまだ話し足りないと思います。御質問もあろうと思いますが、お2方は委員として今後も御参加でありますので、御質問はまた次回にでもできると思います。せっかくなのでいただきました鈴木さん、関さん、近藤さんのお話に時間を充てたいと思います。

4. 少年野球関係者の活動実態報告

まず、全日本リトル協会シニア委員会の鈴木さんから、15分ほどでお願いしていると思います。よろしく申し上げます。

○鈴木監督 私は、全日本リトル野球協会リトルシニア委員会、関東連盟南関東支部所属の横浜青葉シニアと申します。

私どもの活動範囲は、神奈川県横浜市青葉区、皆様にわかりやすく言えば、東名・横浜青葉インターの周辺が、私どもの活動範囲でございます。

主な大会ですが、毎年3月に大阪で全国選抜大会から始まりまして、7月の全米選手権、それから各連盟での全国選抜大会、それが終わりますと、日本リトルシニア野球選手権大会、明治神宮を舞台にしてやっております。その後に、今年から始まりました全国中学硬式野球大会、ジャイアンツカップというのが先日終わりますと、その後に、12月、オーストラリアのゴールドコーストでございますコアラカップ杯に参加と。今年、たまたま世界選手権がございまして、ベネズエラで、今、大会開催中でございます。これは、日本から18名の選手を構成して行っております。

我がチームは、それを目標にして、週5日の練習をやっております。5日のうちの1日は、トレーニングを目標にしてやっております。これは、トレーナーを体育館に呼びまして、2時間ばかり重点的にトレーニングをやっております。そのほか、土曜、日曜、ふだんの日には2日、ボールを握って練習をやっております。これは、あくまでも学校優先という形でやっておりますので、

学校で来られない選手も多いです。

それと、夏休みの期間ですが、夏休みは朝からやりまして、週1回の休み、9時から6時、それを分けてやっております。今までは3年生がおりましたので、3年生は午前中、午後は2年、1年という形で実施しておりました。その中で、3年生は練習試合と大会に主に参加しております。

そういう関係で、年間の試合数は、うちでは180試合。当然、1日で3試合というのもございますから、そういう多い試合数になってしまいますね。練習試合は131、本大会が、今年はいろいろな大会に出させていただいた関係で49試合になりました。

今現在、部員数は109名、1年生が43名、2年生が30名、3年生が36名という母体でやっております。グラウンドがすごく狭いゆえ、一堂に練習ができないという形で、ちょっと分けて練習をしております。人数が多いもので、指導者の人数は、私を含めて12名で実施しております。これは、学年ごとに3名ずつという形でやっております。当然、中学生なもので、親のお手伝いが必要だということで、グラウンド整備、中には草むしり、それと母親の健康管理、水分補給、そういうのをやっております。

部員の学業成績の把握ですが、私は学期末ごとに、まずは通信簿を持って来まして、それをもとにして面談をしております。特に、その中で私が注意しているのは、未提出物があるかないか、遅刻があるかないか、これで、中学は今、全体評価なもので、大分成績につながってくると思います。その辺を強く、私はやっております。先ほども申しましたように、学校優先、当然、文化祭、運動会、それは学校優先で、うちの方は実施しております。

やっと終わったんですが、3年生の進学相談、これは36名全員やります。公立に行く子は1回だけで済むんですが、私学に行く場合は何回となしにやっております。全部が全部、力があっていい選手であれば、簡単にこちらからお願いできるんですけども、なかなかアンバラで、力がある、ないというのはございますから、その辺でちょっと私は苦労しております。

保護者からの進学は、その都度受けているんですけども、成績が出ないと、ある程度の学校には行けない。例えば、慶応高校、うちでも推薦で行かせてもらっていますけれども、通信簿で40近い点数をとるのはなかなか難しいと思いますので、それもいろいろアドバイスを受けながら、そういう形で受かるような塾に行かせております。

高校野球の部長、監督、接点といいまして、うちの選手を見て「欲しい」と。それがその学校の基準内に達していれば、それはすぐ子供、親に話して、即刻、進学は決めさせていただいております。

昨今、高校との間に入っているブローカー、プロ野球の金銭問題等がございましたけれども、我がチームは、それは今まで一度もございません。それだけ素晴らしい選手がいればよいのですけれども、なかなかいないもので、そんなような状態になっております。

私の方からは以上です。

○堀田座長 ありがとうございます。

引き続いて、それでは関さん、近藤さん、それぞれ御報告いただけますか。

○関専務理事 では、私の方から、団体の概要説明をさせていただきます。

私どもは、財団法人日本少年野球連盟ということで、本部を大阪に置いております。1970年7月に設立しております。また、財団法人を、2005年5月に文科省の方から授与されております。

現在の加盟チーム数でございますが、小学部が146、それから中学部が472、合わせまして618、これは本年度の6月末現在でございます。

ちなみに、人数につきましては、小学部が2,879名、中学部が1万6,598名、合わせまして1万9,477名の、現在、日本少年野球連盟に所属している選手でございます。

それから、年間の主な大会でございますが、現在、13ございます。この中に、春の大会、それと夏の大会と、これは全国のボーイズのチームが各支部から予選を勝ち抜いて、春、夏の大会に出て来られるというような形でございます。また、残りの11につきましては、例えば関東ブロックですとか関西ブロックですとか、5ブロックございまして、各ブロックの中での主な大会を挙げたのが、全部で13となっております。

それと、毎年行われております海外との親善交流試合ですが、これは中学部が、世界大会と称しまして1つございます。それから、中国との友好親善野球大会、これも毎年やっておるんですが、中学はこの2つでございます。小学部は、カールリプケンの世界大会に今年度から出場しておりまして、これはアメリカのメリーランド州で今年も行われているんですが、これと日韓友好親善野球大会という、この4つが世界の交流親善大会ということでやらせていただいている団体でございます。

また、本日、大津瀬田レイカーズの実情をお話いただくわけですが、今お話し申し上げました今年度の第37回の春の全国大会に優勝したチームが瀬田レイカーズでございまして、その監督に、今日、御説明していただくとなっておりますので、ひとつよろしく願いいたします。

○近藤監督 大津瀬田レイカーズで監督をしております近藤皓二と申します。

大津瀬田レイカーズというチームにつきましては、13年ぐらいの実績がございまして、10年前に大津瀬田レイカーズという名前を変えました。私自身も野球をやりにまして、ずっと50年近く野球に携わってきた者ですけれども、指導者として30年間、小学生、高校生、今は中学生を教えているという立場でございます。

レイカーズとしましては、毎日の練習活動、これは、滋賀県という非常に田舎のチームでございます。少年野球と申しますと、軟式野球から硬式野球に変わるときに、都会と違ひまして非常に保護者の方の抵抗がまだある。体ができていないのに硬式をするのはいろいろ難しいのではないかなというまだまだ田舎の地域で、13年ぐらい前から硬式野球の中学部として教えております。

それが最近、何でボーイズ、シニア、子供の野球が非常に硬式に移ってきたかといいますのは、

小学校を指導しておりましたときに、小学生から今度は中学生に行きますと、中学生のクラブにつきましては非常に卒業生から不満がございまして、部活動に入っているんだけど、なかなか練習がない、試合がない、先生が出てきてくれない、いろいろなことがございまして、何とか教えてほしいというような依頼も各方面からあったりとか、それから高校野球でもっと頑張りたい、硬式をやりたいといういろいろな地域の方からの意見というのが、やはり田舎のチームもどんどん増えてきました。その中でちょっと頼まれて、大津瀬田レイカーズということで硬式を教えています。

私たちも、中学の中体連の先生方も、教育の一環として、野球を踏まえて指導されているとは思いますが、我々指導者も、まだ小学校から上がってきたばかりの中学生、1年生、2年生、3年生、体力もない子たちをいかに教育するかということで、まず入団説明会を行いました。入団説明会の中では、我々野球部につきましてはこういう形で子供たちを指導しますという形で御父兄にも説明し、子供たちにも説明し、硬式野球というものはこういう形でやっていきますという形で、納得して入ってきていただいております。それには、まず1番に、「高校に進学するのは自分の力で入ってください。野球で入るのではなくて、自分の力で入ってください」ということを、まず保護者の方に説明させていただいております。

それから、部活動にずっと入るわけですが、ヒアリングの資料の中で、活動の状況という形で、順番に説明させていただきます。

年間のおよその活動日数というのは、我々は土曜日と日曜日、祝日だけでございます。月曜日から金曜日までは、各学校で部活動をやってほしいということで、皆さん全員が、陸上部とか卓球部とかバドミントン部とか、そういうところに月曜日から金曜日までは所属しております。年間で120日ぐらいが活動日数になると思います。

それから、学業期間中と夏休みの活動状況ですが、これも基本的には、月曜日から金曜日は活動しておりません。学校でのクラブ活動を優先してやってほしい。あくまでも土、日、祝日ということで活動しております。

1日当たりの活動時間数というのは、大体9時から17時までです。ただ、試合、遠征に関しては、この限りではないと。時間を早く、6時に出発したり、帰ってくるのが8時ごろになったりということもございます。

それから、年間の試合数ですが、レギュラーチーム、3年生のチームに関しましては、公式試合、練習試合を含めまして、大体100試合程度になります。それから、ジュニアチーム、2年生、1年生でございます。これは、50試合程度の試合になります。強い年には、公式試合をしますと1試合だけではなくて、勝ち上がっていきますと、当然それだけ10試合か20試合ぐらい試合数は増えると思います。

現在の部員ですが、3年生が25名、2年生が14名、1年生が21名、合計60名でやってお

ります。指導者の人数は、私も含めて6名でやっております。そのほかに、指導者ではないんですけれども、グラウンドとか設備とか、そういう管理をするOBの御父兄が2名、協力していただいております。

それから、保護者の活動上の役割は、青葉さんも言うておられましたけれども、協力によって成り立っているという面が非常に強いと思います。我々としまして、各クラブみんなそうだと思いますけれども、車両担当とか、それから用具担当とか、それぞれ協力していただいて、父兄の方、保護者会という組織をつくりまして、会長、それから婦人部長とか、そういう組織をつくりまして協力していただいております。我々がいつも保護者の総会をお願いしているのは、自分の息子のためではなくて、60名いたら60名がみんな自分の息子だという気持ちで保護者会を運営してほしいという形でお願いしております。

それから、部員の進路につきましてですけれども、学業成績を把握しているかということですが、3年生になりましたときに、2年の3学期、最終の成績表を提出していただいております。これと同時に、第1志望校、第2志望校、第3志望校まで書いていただいて、一応、我々としましては一覧表をつくりまして、各科目の点数、それから学校名を記入しまして、全部提出していただいております。そのときに、子供と私と一緒に相談して、「わかった。でも、この点数によっては、なかなかこの高校には行けないよ」という形で、そこでまず我々が指導するのは、先ほど青葉さんも言うておられましたけれども、学校での生活面を非常に重要視して指導しております。まず提出物、遅刻、早退、それから授業中に寝ないこと。例えば、体育というのは、野球をやっている子は、昔はほとんど体育で点数は5点をとっていたと思うんですけれども、今の子は2点とか3点とか4点が非常に多いんです。「なぜ君たちは運動能力抜群なのに体育が悪いんだ」と言うと、体育の先生が嫌いとか、それから道具を前に準備しなくてはいけないときに道具を準備しないとか、ちょっとしたことが非常にあるんですけれども、大体、子供たちに聞いていますと、点数の悪い子につきましてはほとんどが、提出物がない、それから先生が嫌い、眠いので授業中に寝ているとか、いろいろな同じような答えが返ってきます。それについては、その都度その都度、ミーティング等におきまして、生活面の指導はそれからどんどん入っていくつもりでやっております。

中学校との関係で留意していることがあるかということは、特別にはございません。中学校とは接点がございませんので、なかなか関係を持ちたくても、どちらかという私たちは積極的に接点を持ちたいとは思っているんですけれども、中学校の方から嫌われているようなので、なかなか接点を持たないというのが実情だと思います。

部員の高校への進路についてどのような対応をしているか。先ほど申しましたように、通信簿等を出していただきまして、5月に子供と親との三者懇を行います。学校とどういう形で三者懇をしているんだということで、自分の希望校、成績等を、学校の先生との三者懇を参考に話をし

いただいています。それによって、私どもの方もアドバイスしてやっております。それから大会が非常に入りますので、9月に入ってから、大体、学校関係で9月から11月ぐらいまでには、中学校との担任の三者懇が3回ないし4回行われると思います。その中で私たちも、父兄を交えまして、子供と進路の相談をさせていただくということになります。その間に、9月に入りますと公立の推薦というのが解禁になりまして、公立から中学の方に推薦という声がかかるという生徒もおります。それになって、初めて私たちも一緒に、「推薦が来たか、君の成績では行けるか行けないか」とか、いろいろな形で相談するという形になっていくと思います。基本的には、接触ができるのは12月ごろと私どもは聞いておりましたので、12月ごろには高校の指導者、監督等が、親と子供と会って「来てくれるか」というような形になって、最終的に決定するというのは、今までは12月以降に公立高校の場合には決定すると。私学の場合も、私たちの場合には学校関係、高校と中学校の進路の先生、担任の先生との話し合いになりますので、我々がその中に入って話をするという事は、まずありません。

部員の高校進学に関して、第三者が入るかどうかということですが、こちらについては、一切そういうことは今までございません。もちろん、プロのスカウト、もしくは関係者が入るということは、我々は一度もやったことはございません。

あと、つけ加えることはありませんけれども、ただ、高校の指導者との接点についてはどうかという御質問に関しまして、我々のOBもたくさん県内の私立それから公立に行っております。その関係で、やはり高校の監督、指導者等につきましては接点がございますので、話したり、高校の指導者が我々の試合を見に来て、いろいろな相談をしてくれたりということは、現実としてございます。その中で、ルールとしては、我々は、進路ということにつきましては、あくまでも中学校が決定することであって、アドバイスはしますけれども、最終的には高校と中学校とで決めてくださいという形で指導しているつもりでございます。

以上です。

5. 意見交換

○堀田座長 ありがとうございます。

大変率直な御説明をいただきまして、参考になりました。皆さん、たくさん御質問があろうと思います。表の野球の楽しい話ではなくて、ちょっと裏側の話の質問が多いと思いますが、そこはよろしく。

○栗山委員 僕も、中学校時代、硬式野球をやっていて、本当にボランティアで教えてくださっている監督のおかげで、今、野球の世界にいられると思うんですが、今回、すごく言いづらい話で、僕らも言いづらいですし、監督さん方もすごく苦勞されながらですけども、ぶっちゃけ、どんなになっているのかというのを皆さんに感じていただきたい。僕らは現場で、いろいろな話を実は聞いたりもするんですけども、実際に今、特待生の問題で、例えば「この子を入れるか

わりにこの子も」とか、それから「レギュラークラス全員でないこの学校に入れない」とか、いろいろな話を聞いたりしますよね。それで、監督さん方がということではなくて、実はこんな話も聞いたことがあるし、こんなようにもなっているようだとかというのを——これって表に出るんですけど、出るんですか——言いづらいとは思いますが、何か現状的に僕らも聞きますけれども、実際にこんなふうになっているのではないかというところを話せる範囲で、本当に申しわけない、聞きづらい質問ではあるんですが、そのあたりを1回、表にみんなを出してしまって、それでこれから野球界がどこに進んだら一番よくなるのかというのを多分考えるところだと思うので、監督、すみません、非常に申しわけないのですが。

○鈴木監督 では、私の方から。

実際問題、先ほど言われたように付け合わせというんですか、それは現在、ないです。

○栗山委員 ほとんど、それは。

○鈴木監督 ほとんどないです。要するに、もう高校側の方で拒否を出しますので、うちの方でお願いしても、それはできません。「こういういい選手を送り込むから、この選手を採ってくれよ」と、それは今現在、ないですね。あと、以前、うちのチームの選手を「全員くれ」と言われたケースはありますけれども、今はないですね。

○栗山委員 それは、どのぐらい前、結構前ですか。

○鈴木監督 今、30歳ぐらいですね。

○栗山委員 では、結構前ですね。僕らのちょっと後ぐらいの世代。

○鈴木監督 そうですね。はい。

○栗山委員 特待のときというのは、高校から「こういう条件で、この選手をくれない？」みたいな——すみません、こんな具体的な話で申しわけないですが、答えられなかったら答えられないと言ってください。ただ、どういう感じでそういうことが起こるのかな、などと、ふと……。

正直、僕も、家に高校の関係者の皆さんが来ていました。それで、正直言いますけれども、高校なのに「こういう条件で」とうちの親に話しているというのは、僕は中学校のときに聞いていましたし。

○鈴木監督 あくまでも、要するに子供には絶対聞かせないと。まずは、高校側と家庭ではやらせないということが条件です。

○栗山委員 監督が、それを全部壁になって。

○鈴木監督 はい、全部受けて。もう、いい選手ですと、いろいろな学校から来ます。それで、その選手が一番合った学校に紹介という形をとりますので、条件面は一度も言ったことはないです。

○栗山委員 そこには、やはり学校の関係者ではなくて、例えばそのOBであったりとか違う人が入ることというのは、例えば監督、部長以外の人が監督に話しに来るということは、あったりするんですか。

○鈴木監督 今現在はないですね。

○栗山委員 では、それは直接、やはり監督と監督がお話しするということではありますね。

○鈴木監督 はい。

○栗山委員 すみません、監督。ありがとうございます。申しわけないです。

○堀田座長 栗山さん、もうよろしいのですか。

○栗山委員 はい。多分、現状を知っていただいた方がよいと。

監督、ありがとうございました。

○堀田座長 どうぞ。

○宇津木委員 今の栗山さんの質問と、ちょっとダブるところはあると思うんですけども、ほとんど、何か今3名の方の話を聞いていると、もう本当にきちんとやっているのではないかなと思うんですよね。

ただ、やはりいろいろな現状を耳にすると、かなり随分難しいというか、どろどろした部分が話に出るんですよね。

多少なりとも、やはりいつも私が思うのは、今、高校野球をやっていますけれども、子供たちが本当にいいプレーをしているわけですよね。そういう姿を見ると、何でこういう問題が起きるのかなというのが不思議でしょうがないんですよね。そこには、やはりお互い、人の中で集まりがあって、その中でいろいろな難しい——難しいよりも、何かおかしい面が出てきているのかなという感じはするんですけども、学校との面談とか学校の先生方との話し合いというのは、監督たちはしないんですか。

○鈴木監督 私どもは、中学の先生といろいろ接点を持ちたいんですけども、なかなか「プライバシーという問題があるから」という形で断られるケースが多いですね。私どもは、その選手の学校での授業態度、いろいろ先生から情報を集めたいんですけども、それをもとにして私どもがまた、野球を教えていく上でいろいろ注意しながらよい形に持っていきたいと思っているんですけども、なかなか中学側が受けてくれないですね。

○宇津木委員 すごく、そこが一番大事だと思うんですよね。やはり学校とチームとが、ある程度、子供たちのために、どうその子供たちを生かしてあげるかというのが大事ではないかなと思うんですよ。

○近藤監督 先ほど私も、中学との接点がないという話の中で、我々は田舎の地域ですけども、田舎でも、中体連というものがございますね、中学の野球部。それから、硬式野球がある。そのスタートから、要するに、硬式に行く子は中学ではもう基本的に面倒を見ないという何かがあるようなのですよね。だから、中体連には入れませんと。それで、中体連の会長とも一遍、話はしたことがあるんですけども、「何で我々が中体連の方で入れないのか。あくまでも違うものだ」というようなことで、ちょっといろいろな事情はあったんですけども、そういう接点をど

こかに求めれば、我々も中学の先生と、子供に対して生活面とか進路指導というものができればすばらしいのではないかなと思うんですけれども、こちらの方から働きかけることがなかなかできない。そういう接点を持たれるような、よい方向に行ってくれたらいいなと思うんです。

それで、今、子供たちが、ボーイズ、シニアにどんどん増えてきている。それから、軟式のクラブチームも全国でどんどん増えてきている。そうすると、中学の野球というのはどんどん衰退してきていると。そういう現状も踏まえて、中学の指導者の人たちも、やはり何かを考えてほしいなと思うんです。

例えば、今、栗山英樹さんがいらっしゃいます。我々、よくテレビで拝見させていただいたんですけれども、NHKでも今、高校野球を非常に盛んにやっておりますけれども、今まで、どちらかといったら栗山さんも、特待生で行ったと思うんです。松井秀喜にしても城島にしても、みんな特待生だと思うんです。NHKで、あれだけスーパースターをどんどん放送している。それから高校野球でも、あれだけどんどんすばらしい試合を放送している。そうしたら、中学生は、やはりそういう選手に憧れるわけですね。だから、生活面もいろいろ問題がありますけれども、やはり野球のすばらしさというのは画面からどんどん出てきている。それに憧れて、ボーイズやシニアで一生懸命野球をやりたいという子供の夢を、何らかの形でよい方向に持っていくというふうにしてほしいなと我々は思うんですけれどもね。

○宇津木委員　そこで、今のお話で、やはり学校の先生ともそういう話の機会、場を設けるということは、私は大事ではないかなと思うんですけれども。

○近藤監督　私もそう思います。よろしくお願いいたします。

○宇津木委員　何とかそういう機会を皆さんの力でやってあげて、やはり子供たちのためにどういう方向に持っていくのがよいのかということを考える時期ではないかなという気がするんですけれどもね。お願いします。

○堀田座長　どうぞ。

○伊藤委員　何点かお聞きしたいんですが、委員の先生に対しては、また機会、時間があれば後で質問させていただきまして、少年野球関係者の方に直接ということになるのかどうかちょっとわかりませんが、お話を伺っていたのは、先ほどの話では、登録部員は16万8,000名いるということですね。この16万8,000名の選手たちが、どういうルートで高校野球に入ってこられたのかという、これは少し確認させていただきたいんですよ。

というのは、今、ちょっと話が出ましたけれども、この野球界団体の図を見ると、高校野球も大学野球も学生野球であるということですが、この学生野球の中に中学校の連盟がないんですよ、硬式野球は。ということは、中学校で硬式野球をやっている、そして高校の野球部に入るといふ、このルートは公式的にはもうほとんどないような状態ですね。それでいながら、今日お話を伺いますと、少年野球の方が非常に活発にやっておられて、小学生から中学生、これらを養成

されておるといことになると、この高校野球へのルートというのは、ほとんどが少年野球クラブあるいはチーム、これからがほとんどなのか、それとも中学校の部活動、これからの方がほとんどなのか、そのあたりの関係がちょっとよくわからないということです。

これは、1つは、どういう形で特待生の推薦入学を認めるかというような場合に、学校を必ず通さなければならないのかどうかという、この問題は前回もあったと思うんですね。これとの関係で、もし中学校における硬式野球クラブがほとんど活動していないというようなことになれば、中学校を通してやるというシステムは絵にかいた餅になってしまって、ちょっと困るのではないかなという感じもしておりますので、そのあたりをおわかりの方がおれば、少しお願いしたいと思います。

○堀田座長 これは全体のことなので、田名部さん。

○田名部参事 そうですね。先生が御指摘のように、この表に中体連、中学校は抜けているんですね。学生野球協会設立のときに、義務教育の部門は協会の中から外そうということで、高校、大学だけに限ったいきさつがあったようです。現在、中学校の参加校数は約9,000校、1万校弱で、全体の部員数は30万人で前後しております。つまり、大ざっぱに1学年10万人ずつ。私たちの方も、1学年6万人ですから、大体、中学校を卒業する10万人の生徒のうちの半数近くが高校へ行っても野球を続ける。そして、今日御紹介した両連盟は、ざっと両方で2万人いらっしゃるようですが、ここも5,000から6,000、7,000ぐらいが卒業されるようですから、そのほとんどは高校へそのまま進まれるということですから、各学年5万から6万人のうちの20%ぐらいは少年野球からの出身、あとは中学校からと。

以上です。

○堀田座長 中学校からというのは、中学校で硬式野球をやっている学校からですか。

○田名部参事 中学校は、硬式野球はありません。中学校は、軟式野球だけです。中学ではないクラブチームが硬式野球。もちろん、軟式野球のクラブチームもありますけれども。

○堀田座長 わかりましたか。

○伊藤委員 大体わかりましたが、数からいくと、そうすると中学校の軟式野球の方から高校の硬式野球部に入るとい数が6万人ぐらい？

○田名部参事 いや、5万人ぐらいです。

○伊藤委員 5万人ぐらい。そして、少年野球クラブですか、これはもう硬式野球ですよ。小学校から指導しておられますね。小・中を指導して、2万人ぐらい入っていくと。

○田名部参事 1万人ぐらいです。

○伊藤委員 1万人ぐらいですか。

それで、こう言っは悪いのですが、優秀な選手として、いわゆるレギュラーメンバーとして出場できるという者については、両者の割合はどんな関係でしょうか。

○堀田座長 誰が適切ですか。

○田名部参事 やはり、全体的にはこの少年野球の選手のレベルが高いと。もちろん、中学校のレベルの高い生徒もいますけれども。

○堀田座長 北村さん、わかりますか。高校に入った中学生たちのレベルはどうなっているのか、軟式コースか、あるいはクラブコースかという。

○北村委員 その比率は、学校によってさまざまだと思いますが、レギュラーメンバーの比率は、当然、少年野球をしておられた生徒が多いと思います。

○堀田座長 という感じですか。

もう少し質問があるようですから、続けてください。

○伊藤委員 もう1点、そのうちのいわゆる特待生として扱われている人たちについては、これは16万8,000人全員ではないですよ、その一部ですから、これも中学校の軟式野球から入ってきた者と少年野球クラブから入ってきた者とを比べると、どういう比率になるのでしょうか。

○近藤監督 比率的にはちょっとわかりませんが、クラブチームの子供たちの方が圧倒的に多いと思います。

○伊藤委員 そうすると、特待生問題を考えるという場合においては、クラブチームとの関わり合いというあたりを、やはり重点を置きながら検討していかなければならぬ、こんなことになりそうな感じはするわけですが。

○堀田座長 ありがとうございます。そのことを確認したくて御質問されたんだと思います。

それはそれでまとまりましたので、では、新しい点ですね。

どうぞ、北村さん。

○北村委員 特にお3方の中で、近藤監督の地域は私との隣県でございますので、非常に興味津々で聞かせていただきまして、いろいろと勉強させていただきましたけれども、前回、私学の独自性ということいろいろとお願いやらお話やらをさせていただいた中で、よいお話を聞かせていただいたなと思っております。

これは、地域によって差があるのかもしれませんが、やはり高校の募集現場といたしましては、あくまでも公立の中学校の進路指導または校長先生の部分を必ず経由してもらおうということが大きなポイントになっているかと思えます。やはり、生徒は野球部員だけではございませんので、我々が特に神経を尖らせておりますのは、こんなことを言ったら少年野球の関係の方には申しわけない表現になるかもしれませんが、中学校の方が後になって募集に対しての情報をお知りになるということが起こりますと、高校と中学校の関係が非常に危ういという形になりますので、我々としてはあくまでも中学校の進路担当または校長先生を経由したお話で、それは特待生いかににかかわらず生徒募集させていただいている、そういう認識を持っているということ、御参考までにお伝えしておきたいと思えます。

○堀田座長 ありがとうございます。

何か特に、それに対してありますか。

○近藤監督 中学校の方も、今、先生がおっしゃったように、はっきり言って田舎の学校でも、中学校の担任、生徒指導の先生の考え方というのがばらばらなのですね。我々クラブチームの生徒に関する考え方というのが、非常に学校の先生によって、個人差があるのかもわかりませんが、ばらばらであるということが非常に困っているということと、この間、1つ、ある事件があったんですけれども、うちの子供が、頭のよい子ですけれども、「県外の私立に行きたい」と言ったら、担任の先生が、「その資料は県内だったら取り寄せるけれども、県外は自分で勝手にしてくださいと。今はインターネットもありますから、インターネットで調べて自分で勝手にしてください」と言う担任の先生があつて、父兄が怒ってこちらの方に相談に来たんですけれども、「そんなことはないだろう。県外であろうと、やはり生徒指導の先生が資料を揃えて生徒指導するというのが本来の姿なんだから」ということで一応は帰したんですけれども、やはりそういう先生、個人個人の、能力と言ったら失礼ですけれども、指導力によっては非常にまちまちな面がありますので、その辺を私たちは非常に心配はしているんですけれどもね。

○堀田座長 そういう事情もあるという話ですけれども、後藤さん、どうぞ。

○後藤委員 まず、ボーイズの、月曜日から金曜日まで部活動に入られているということで、その部活へ入られた公式試合は、ボーイズのゲームと重なる場合はどちらに出られるんですか。

○近藤監督 これは、ちょっといきさつがいろいろありまして、一応、クラブチームには、例えば陸上なら陸上、自分は今400メートルをやっていると聞いている子がいるとしますね。そうしますと、やはり気持ち的には土日の野球というのが気になりますので、部活動としては陸上をやっているんですけれども、専門的にタイムを計ったり、それで何とか競技会に出てよいタイムを出すという気持ちが、そこまではないようです。中には、例えば砲丸投げで県で3位になったという子がうちにいますし、リレーで近畿大会に出るので野球の試合を休ませてほしいと言っている子もいます。だから、それはやっている本人の気持ちの問題と、学校が、いい記録を出す子は何とか部活動で一生懸命、月曜日から金曜日、面倒を見てくれるんですけれども、記録が出ない中途半端にやっている陸上部の子は、どちらかという学校部の先生から、「君はもう来なくていいよ」と言われている子もいます。いろいろです。

○後藤委員 わかりました。それが1つ目。

それから2つ目は、いろいろなシニア、ボーイズに、僕は仕事柄、行くんですけれども、あるシニアへ行きましたら、「うちのシニアは、あそこの高校、ここの高校と、5つか6つ枠がある」ということを言われるところが結構あるんですけれども、北村先生のお話によると、高校の募集につきましては中学校が窓口で、生活指導であるとか成績を提示してもらわないと採用できませんよね。

ところが、現場の方では、そちらの方はわからないと。中学との間柄、コミュニケーションをとらないとだめだと。どう考えたって制度上は、野球ももちろんですけども、そっちの方の書類なりなんなりは必ず要るわけですから、いつまでもこの両者がコミュニケーションをとらないと、どこまで行ってもお互いの……。前回の中体連の部会長のお話にあるとおり、中学側は生徒の指導について全く知らないうちに、少年硬式の監督と高校を決めてしまったと。後から言われてもという話が多かったんですけども、これはいつまでたっても接点がないなど。

岐阜市内の中学校の中体連ですね、部活動、24のチームが軟式野球はございまして、野球経験者が3人しかいないんです。ですから、どうしても野球をやりたい子は、少年硬式へ行きたがる。行きますと、そこでいろいろな高校への橋渡しが監督はできますよ。でも、学校のことは知らないと。

現場へ行きますと、我々も経験があるんですけども、野球がうまくなりたいたい子供は、野球の監督の言うことはよく聞くんですけども、それ以外の……。だから、ボーイズ、シニアへ来た学生は、「野球を指導していてこんなにいい子はいない」と大体思うんですよ。ところが、中学校へ行きますと、学校の先生の言うことは聞きませんので、素行が悪いとなるわけですね。それはよくわかるんです。そこら辺の接点が、今のお話を聞くと、ないなというのがよくわかりましたし、「うちのシニアに来たら、あそこ、あそこの高校にはうまくいけば行けるんだという枠がある」というようなことを聞いたときに、「あれ？」というようなことも思いますよね、やはり。

だから、そこら辺の話をもう少しオープンにしていかないと、学業あるとか学校での生活態度を知らない我々野球人が、「こんないい子はいないから、どうしてだ」と思うのも無理はないし、そこに中学校の実態を知らない野球人が混ざったら、それはいろいろな問題が起きるのは当然だなと思いますけれども。

ちょっと質問ではなくなっただんですけども、皆さんに実態説明をさせていただきました。

○堀田座長 ありがとうございます。

中学での態度とクラブで野球をしている態度が違うのではないかと、だからきちんと連絡して、情報が入らなければいかぬのではないかと御主張のようですが、何かその点についておっしゃることはありますか。

○近藤監督 私にしてみますと、資料をいただいた中で、監督の言うことは聞くけれども先生の言うことは聞かないということについては、物すごく私自身、不満を持っています。私たちは、土曜日、日曜日だけしか子供と接しない。野球が好きだから野球の監督の言うことは聞く、学校の言うことは聞かないという先生方の意見については、学校の先生は月曜日から金曜日まで子供を指導しているわけですね。その中で何でそういう言葉が出てくるのか、私には不思議ではないと思います。

○堀田座長 お立場の考えはわかりました。

どうぞ、ほかに。

○望月委員 鈴木さん、関さん、近藤さん、今日は貴重なお話、ありがとうございました。

今のお話を伺いまして、学業とスポーツの両立にも御配慮されておられますし、進学の上での十分な配慮がされている、そしてブローカーなどもないということで、非常に安心する話を今日は聞かせていただきました。

でも、一方で、前回ちょうど中学の担当の方においでいただいて話を聞いて、今、後藤委員からの話もありましたし、さまざまな新聞報道、それから最近も幾つか本が出ているものですから、私もいろいろと高校野球などをめぐるルポルタージュなども読ませていただいたのですが、あまり芳しくない話も一方で聞こえてくる。

例えば、今年6月1日の読売新聞ですと、関西の私学の監督の話として、人身売買に近いことまで行われているという話などもあるのですね。今日、多分ここにおいでいただけるということは、皆さんのところではこれがないからおいでいただいているとはもちろん思っておるのですが、率直に言って、今日おいでいただいた鈴木さん、関さん、近藤さんの知っている範囲では大丈夫だけれども、ほかのところでも大丈夫だと、胸を張って少年野球の世界を代表して言っていただけるのか、私の足元のところは大丈夫だけれども、ほかのところはしかるべき調査をしてくれということになるのか、そのところはちょっと言いにくいかもしれませんが、どの範囲での今日のお話を聞いていたらよいのかというところで、差し障りのない表現で結構でございますから、言っていただけるとありがたいのですが、いかがなものでしょうか。

○堀田座長 どうぞ、お3方。

○近藤監督 ボーイズの方の代表として、私は来ています。私どもの方としては、そういうことではないわけですが、全部で470チームほど、中学部、ボーイズ関係があります。今日のこのヒアリング、先生方の意見、皆さんの意見を聞いて、ボーイズの方としては、そういうことはないというように連盟からも指導してもらいたいですし、仲間としてもそういうことがあったかどうかは、私たちは聞いていませんので、あったかもわかりませんし、なかったかもかもしれませんし、ただ、今後につきましては、そういう考え方を一本にして、中学の硬式野球、それから高校に進学する子供たち、その辺がうまくいくように、連盟の本部の方から各チームに通達を出して、指導者、監督一同が、もう一度、襟を正してやりたいなと思っております。

ただ、特待生制度については、我々は大賛成ですので、ぜひ高校の方としては、特待生制度を残していただいてやってほしいなと思います。

○堀田座長 鈴木さん、いかがですか。

○鈴木監督 私は、先ほどちょっと言わせてもらったんですけれども、中学との接点がない。特に、横浜地区は、中学の軟式野球がないから、野球をやりたいからクラブチームへ来たということを行っている。なおかつ、私どもも、その選手の中学での生活も、学校側と接点を持ってやりたい。要するに、野球だけよければよい、学校での態度はどうでもよいという気持ちは、私ども

は全然持っておりません。特に、その辺はもう少し県の教育委員会あたりが動いてもらって、「そういう相談があったときには素直に受けなさいよ」というような指導もやっていただきたいなと思います。

○堀田座長 望月さんの御質問は、人身売買的な監督の扱いもあるように報じられておりますけれども、皆さんのところでそういうことがないのはわかりましたが、ほかのところでありそうなのかどうなのか、御存じですかという質問です。

○鈴木監督 現状ですと、私どもが所属している関東連盟では、そういう話は聞いたことがございません。

○田村委員 今日、よいお話をありがとうございました。

1つお伺いしたかったのは、サッカーの場合は、割にスムーズにいらっていると聞いているんです。つまり、高校サッカーと、クラブチームもあるし、それから少年サッカーみたいなものもあるようですが、そのつながりが野球ほどぎくしゃくしていないという話も聞くものですから、その辺はどうお感じになっておられますか。ほかの競技のことをお聞きするのは、ちょっと恐縮ですけれども。

○近藤監督 滋賀県で、野洲高校というのがサッカーで日本一になりました。そのときには滋賀県も、野球だけが日本一になっていなくて、サッカーに先を越されたという状況で、非常に野球は肩身が狭いんですけれども、それも小学校、中学校、セゾンとかいろいろなクラブチームがあるサッカーの選手が一遍にぼんちと行ってしまおうというような形が、サッカーの場合には意外とスムーズにとれるのかなということは聞いたことがあるんです。

ただ、野球の場合には、そういう特待みたいな形でぼんちと同じ高校に10人も15人も入るということは考えられませんので、サッカーの場合には何かそういうことをちょっと聞いて、サッカーの特待というのと野球の特待というのととはまた全然違って、サッカーは何かすつと入れる、今までも問題がないようですね。もちろん、奨学金制度、授業料免除だとか、そういうものも認められているというようなことも聞いていますので、「何で野球だけが」という思いも、若干あるのはあるんですけれども、ちょっと組織が違うようなので。

○堀田座長 辻村さん、どうぞ。

○辻村委員 先ほどの話の繰り返しかもしれませんが、中学校側とそちらとで、なかなか接触がないと。もう少し相互理解が進めたらという話ですが、今、そういう状況の中で、実際問題として中学生は、しっかり野球をやって、それであの高校に進んでさらに続けたいと思っていると。しかし、そこは中学校とは十分意思疎通されていないとすると、高等学校側が「いや、あの生徒にぜひ来てほしい」という話になりますね。そうすると、それは保護者なり本人に伝わって、本人なり保護者は中学校側に行って、「あそこの高校への進学資料をつくってほしい」という話になるわけですね。ただ、中学校側とすると、単に野球だけではなくて、先ほどからあり

まず学業成績、いろいろなものをトータルして、その高校がふさわしいかどうかを選ぶという気持ちがある。一方で、しかし、あの高校に行って野球をやりたいというぶつかり合い、そしてそこに意思疎通が欠けているという状況の中で、現実問題としてはどういうことになるのでしょうか。つまり、「いらっしやい」ということを聞いた親は、中学校側に行って、「あの高校への進路資料をつくってくれ」と中学校側に迫る。すると、中学校側の進路指導は進路指導で、トータルとして進路指導しているわけですから、その不一致の部分、それは頻発しているということなのではないでしょうか。親と生徒対中学校、それから高校も絡んで、そのあたりのところはどうなっているのでしょうか。

○近藤監督 我々が指導していますのは、例えば親が、「子供があそこの学校に行きたいから、あそこの推薦を書いてくれ」とか、まずそれはないと思うんです。ただ、それは三者懇の中で担任と子供と親が、自分はどこの高校に進みたいんだというのは、事前にある程度、打ち合わせしてあると思います。成績云々で、公立の場合、「君はここは無理だから、もう一つ落としなさい」、もちろん私学も含めてですけども、そういう話をしている中で、野球活動をしていて野球も優秀だと。すると、高校から推薦の話がある。それは、どちらかと言ったら高校から直接学校に行くというよりも、我々監督の耳に先に入って、「何とかあの子を推薦で採りたいので、成績等はどうか」という形の打診はあります。その中で、今、子供に第1希望、第2希望、第3希望を挙げていただいていますけれども、うまくマッチングすれば、それで非常にいいわけですね。本人もここを希望している、向こうからも何とか推薦を出したいと、そうした場合には、高校の方の校長先生から中学校の校長の方に推薦を上げてくださいますと言えし、スムーズに進むと思います。

ただ、それが全然マッチングもしないところから来たときに、事前にやはり我々は希望を聞いていますので、マッチングしないときに聞いた場合には、一応、親には「こうこうこういうところの希望というのは、野球というところを、一応、進路の一つとして考えたらどうだ」というニュアンス的な形でアドバイスをしたりとか、親と子供と話して「どうだ」という形で進路相談をしたりということは、あるのはあります。

ただ、現実には、推薦が来ますのが9月以降になりますので、そういう時期を見計らってでないで、早く言いますと、一番中学の先生が困っておられるというのは、推薦がもう早く決まってしまうと、生活面で非常に困ると。授業中に寝てしまうとか、授業をエスケープしてしまうとか、非常に態度が悪くなるとか、そういう生活面で困るので、中学の方としましては、早く推薦を出したくない。この子は生活面に問題があったら、推薦を早く出すともっと悪くなる、そういう心配をされるので、中学の方は、進路のことは慎重にしてくれ、あくまでも中学と高校との問題であるからということだと思えます。

○辻村委員 それで、そのときに、その高校は来てほしいと。通常は、入試というのはそれぞれ

もちろん憧れといいましようか、希望の高校があって、それに向けて中学生諸君はいろいろな面で努力するわけですね。しかし、その中で「おまえ、来てほしい」というのは、ほかの生徒との関係からいうと、それはいろいろまた別途の議論はあるだろうと思うんです。

1点、今日、お伺いしたい点は、その勧誘のときに、「いや、来てほしい」というときに特待生という話が出て、そして個別に保護者なり、生徒に伝わるかどうか知りませんが、「こういう条件でこちらは迎え入れる用意があるよ」という話がそこで出てくるということでしょうか。

○近藤監督 私の経験したことでは、こういう条件で来てほしい、例えば仮に「授業料免除しますから来てほしい」ということは、高校の指導者から私の方にはありません。こちらもそういうことは要求しませんので、向こうの方が来てほしいということに関して、例えば中学の方に学校を通して言いますね。それで、最終的に推薦で、中学校の方も推薦書を書いていただいて、無事、話がうまくいったと。その中でどういう形にするのかというのは、高校が中学、父兄の方たちに言うことであって、我々はその件に関しては関与しないとしております。

○堀田座長 時間があと5分を切っているんですけども、河上さん、ゼッターランドさん、いいですか。ありますか。

○河上委員 今、話を聞きまして、質問というよりは感想になってしまうんですけども、中学との問題のところで、私は随分疑問を感じました、はっきり言いまして。今、推薦の時期も、公立の場合、そんな10月とか秋にあるわけではないので、東京は1月の後半でございますし……

○田村委員 スポーツ推薦は早いんです。

○河上委員 スポーツ推薦ですかね。これは、公立の場合もですか。東京の場合、スポーツ推薦はほとんどありませんので、どうしてそんなに早い時期に出てくるんだろうか、それでお金の問題もどうなのだろうか、何か非常に私はショックを、今、学校関係者としては頭を殴られたような気がしているのが、やはりこれは、中学校の校長会の会長、中体連の会長が今日は欠席でございますけれども、相当大きな意見の隔たりはあるだろうと。

私も、私立を経験していますけれども、私立の場合には、田村先生に怒られるかもしれませんが、ある程度わかるところはある。公立を問わず、ただ、中学校の先生との関係の中で、非常にきれいなお話がいっぱい出たんですけども、ちょっと私はクエスチョンをつけたいと思います。

○堀田座長 御意見でした。

ゼッターランドさん、ありますか。

○ゼッターランド委員 本当に本日は貴重な御意見をいただきまして、ありがとうございました。

唐突で、しかも下世話な質問で大変恐縮ですけども、実際に子供たちが、年間、野球の活動をするに当たって、スポーツは当然お金がかかるというのは、現場一番よくわかること、実感していることだと思うんですが、ちなみにその活動というのは、遠征、あるいは用具の調達ですと

か、グラウンドを借りる費用ですとか、そういうことをもろもろ含めると、1人平均大体どれぐらいの活動費用というのが必要になってくるのでしょうか。

○鈴木監督 チームで集めるお金は、うちですと9,500円。その中で、ボール、一番かかるキャッチャーのレガースとヘルメット、これを賄っております。あと、グローブ等は個人で買っていただいております。遠征は、その都度お金を集めております。だから、年間でどのぐらい集めているのか、ちょっと私どもも把握していないので申しわけないんですけども、リーグだけはそれで。このリーグの9,500円というのは、本当に安いです、はっきり言いまして。普通ですと、あるところだと、もうちょっといっている、5万円ぐらいいっているというのも聞いております。ただ、グラウンドがうちにあるということであって、それで賄っていけるという感じですね。

○堀田座長 それでは、伊藤さん、簡潔に。

○伊藤委員 1人の負担額はわかりましたが、全体としての運営経費、これはどう賄っておられるのか。例えば、指導しておられる方なども、かなりかかわっておられますから経費もかかると思いますが、ちょっと教えていただければ。

○近藤監督 今、監督がおっしゃったように、クラブチームですので部費というものをいただいております。今、青葉さんが9,500円で、遠征費は別途いただくということですけども、うちのチームは月1万2,000円をいただいております。その中で、遠征費とか、そういうものは全部賄っております。1万2,000円に60人を掛けますと、約70万円集まりますね。年間ですと約900万円。もろもろありまして900万円が、1年間の運営費と。その中では、当然、試合に行つて勝てば、1日、例えば大阪、和歌山、奈良とか、そういうところへ行きますと、交通費なども全部負担しますので3万円、4万円。1回勝てばそのぐらいかかるわけですので、2回、3回勝つと、その都度かかるという形で、運営費としては全然黒字になるということはないです。

それで、青葉さんもそうだと思いますけれども、指導者は全員が、うちもボランティアです。

1日1食の600円のほかほか弁当で頑張っているわけです。だから、塾で勉強に行っている人たちは、何万円と稼いでいますけれども、我々指導者は、全員ボランティアでやっております。

○栗山委員 その中で、実際に、お金がなくて中学校で野球をやれない子がいるのか、それとも今度、高校に行ったときに、お金が結構かかりますよね。実際に、お金の問題で野球をあきらめなければいけない子たちが今いるのかどうかというのは、中学校とこれからというのは現状としてはどんな感じか、両監督にお聞きしたいんですが。

○近藤監督 はっきり言いまして、最近、子供たちは、離婚が多くて母子家庭の人が非常に多いです。だから、将来、今、私どもの子供でもいるんですけども、この子供たちが高校へ行つてお金がかかったときに、実質上、野球部として活動できるかどうかというのは心配ですね。だから、どうだ、こうだという、実際それにお金絡むということは、まずはないと思うんですけども、できるだけそういう子供たちは公立に行つて、安い学校に行つて、頑張つて野球をやりたいという

ことはあります。

○栗山委員 ということは、本当の意味で特待の奨学金制度で野球を続けられる子たちは、実際にたくさん出てくるとらえてよいわけですね。お金や奨学金があれば、野球を一生懸命続けられる子供たちは増えるにとっていいですか。

○近藤監督 ええ。できたら、そういう経済的な支援が必要な子で、野球がこういうところでしたいというのであれば、特待生制度を設けていただいて、学校で奨学金制度とか、そういうものがあれば利用して、子供にやらせてあげたいという子は、これからも出てくる可能性はあると思いますね。

○堀田座長 ありがとうございます。

時間が過ぎておりますが、私からも1点だけ、簡潔に聞かせてください。

近藤さん、鈴木さん、それぞれ進学相談に応じられて、成績表までとっておられるんですけども、どうしてそんなことをされるんですか。進学のごことは中学に任せておけばよいのではないか、なぜクラブでそういうことをされるのか、その理由を簡潔に聞かせてください。

○鈴木監督 野球で行く場合は、高等学校のレベルに合わせて、その点数に満たない子が、例えば慶応高校へ行きたいと。通信簿を見ればもう一目瞭然で、すぐにわかるわけですね。そういうために、私は見ております。

○堀田座長 そういう子に、あきらめさせるためですか。

○鈴木監督 まあ、そうです。行くのであれば、もう少し勉強しなさいよという指導ですね。

○堀田座長 お話の中に、何かいろいろ高校にお願いするというようなお話もありましたけれども、そちらの面ももちろんあるわけですね。

○鈴木監督 そうですね。先ほど、近藤さんが言われたように、県立に行けない、点数が足りませんよと。だけれども、高校には入れないといけないという場合が出てくると思います。その場合は、高校側にお願ひして、奨学金制度、要するにお金を借りて、卒業して働いて、10年間で無利子で返すという制度がございますよね。それを、私どもは指導しております。

○堀田座長 それを、なぜ中学校の方にさせずに鈴木さんの方でされるのかというのが、私の質問ですけども。

○鈴木監督 そこまで私どもも勉強不足でわかりませんでしたけれども、高校側から私どもの方へ直接そういう話が来ますので、親と子の対応は、そういう形でやらせていただいていますね。

○堀田座長 ありますか。簡潔に。

○近藤監督 高校に入るために野球をやるわけではなくて、あくまでも勉強プラス野球がしたい。例えば、高校に入って次のことを考えますと、今の子供たちは、やはり大学に行きたいという子が非常に多いですね。今、中学でしっかり勉強して、ある程度やって、高校で高校野球をやって、次に大学に行こうとしたときに、今度は野球で大学に入れても、卒業できない子が非常に多いと

いうことはよく聞きます。そういう面も踏まえて、今、例えば自分で野球を高校でやりたいとした場合には、「君のレベルではこの高校しか無理だろう」と、いろいろなアドバイスを与える資料の一つにもなりますし、私学は別にしまして、先ほど言いました公立の推薦というのがあるんですね。「うちの高校は、24を持っていないと推薦できません。それにプラス、生活面が加味されます」と。高校によっては、この子は22しかない。うちの高校の推薦基準からは外れるけれども、例えば生活面はどうだと。それは、担任の先生と相談していただいて、それで後押しできるのは、我々が一生懸命その高校の先生に後押しをして、中学校の先生とその辺を詰めていただいて、入学を認めてもらう、推薦していただくというアドバイス等はさせていただいているということです。

○堀田座長 時間ですので、今日は貴重な情報をお3方、どうもありがとうございました。いろいろ失礼な質問があったとしたら、お許してください。どうも御苦労さまでした。

ということで、今日のヒアリングは、5分ほど超過しましたが、終了いたしました。

後の日程について、田名部さん。

6. 次回日程

○田名部参事 長時間、ありがとうございました。

今回は、9月14日、そしてまた同じ曜日の翌週21日を予定しておりますが、次回、ヒアリングを高等学校体育連盟からもぜひと思っているんですが、ちょうど伺います14日当日に、この問題を高体連でお話しなさるといので、どうしても翌21日になりそうです。次回については、もう少し事前に御相談してから連絡させてもらおうと思いますが、もう一つ、高校の教育現場での実態と伺いますか、いろいろな評価、成績の評価等もありますので、それを資料として、島宮先生と一度、相談したいと思っています。

あと、前回、宿題をいただきました議事録の公開、これはやはりぜひ進めるべきだということで、つまらぬあいさつの部分は抜きまして、基本的なところを、やはりそれはちゃんとさせていただこうということで、皆さんの御了解が得られれば、数日のうちに連盟のホームページに出したいと思うんですが、いかがでしょうか。

○堀田座長 つまらぬ点を省くことを含めまして、いかがでしょうか。よろしゅうございますか。

(異議なし)

○堀田座長 では、そういうことで。

○堀田座長 日程が厳しくなっておりますので、まだまだ調査しなければいけないこともありますけれども、全部呼ぶのではなくて、調べてもらうことはどんどん事務局に調べていただいて、御報告もいただきながら協議を進めていきたいと思っております。そうしながら、論点も固めていきまして、実質的な審議の方に早く入れるように運びたいと思っております。

今日は、どうも御苦労さまでございました。ありがとうございました。